

親密な関係の維持に関するコミュニケーション研究の概観

— 日常的コミュニケーションへの着目 —

多川 則子¹⁾

第1節 はじめに

現代の恋愛や夫婦関係の様相は、ひと昔前とはかなり異なるといわれている。柏木・平山（2003）は、結婚をめぐる意識変化を指摘している。夫婦の平等主義が浸透し、また、結婚に愛情や精神的安定などの個人のパーソナリティに関わる機能を重視する傾向（森岡、1993）が強くなっている。1960年代に恋愛結婚は見合い結婚を上回り、現在では恋愛結婚は結婚の主流となっている。このような意識の変化は、青年についても当てはまる。鈴木・山浦（1995）によれば、女子大学生には女性の自立精神が表れ、結婚相手を「一個の人間」とみており、また、結婚が「家」と「家」の関わりという旧来の風潮が消えつつある。こうした趨勢を受けて柏木・平山（2003）は、夫婦関係における「愛情」を重視する傾向の端的な現れであるとしている。つまり、夫婦関係と恋愛関係との垣根が低くなっていると考えられる。新しい結婚の形として、法的手続きを経ないで事実婚を選択するカップルが注目されることもまた、同様の傾向を意味するものと考えられる。

1990年代に入って行われた日本の結婚・夫婦関係に関する研究は、結婚をめぐる意識・感情に夫婦間のギャップがあること、特に中年期以降の夫婦ではこの傾向が著しく、配偶者や夫婦関係に対する満足感は妻の側が顕著に低いことを明らかにしている（柏木・平山、2003；菅原・詫摩、1997）。また、柏木（2003）は、結婚前、二人の間に愛情の確認はあっても、現実の生活に伴う役割についての十分な検討や了解が欠けていることが、結婚後の葛藤や夫婦間のズレを生む可能性を指摘している。

このような状況を踏まえると、夫婦関係と恋愛関係の問題は密接に関連し、またカップル間の葛藤やズレ、日頃の関わり合いといったコミュニケーションの問題が検討されるべき主要なテーマであるといえる。そこで、本

稿では、恋愛や夫婦関係といった親密な二者関係におけるコミュニケーションの研究に焦点を当て、関連する研究を概観する。特に、近年、注目されてきている日常的コミュニケーションについての研究に焦点を当てる。

第2節 日常的コミュニケーションの重要性

対人コミュニケーションの研究はこれまで、関係発展期や崩壊期におけるコミュニケーションの役割（e.g. Cupach & Metts, 1986; Huston, Surra, Fitzgerald, & Cate, 1981; Miller & Parks, 1982）、葛藤生起時（Zietlow & Sillars, 1988）や問題解決時（Rusbult, Johnson, & Morrow, 1986）のコミュニケーションの役割に主に焦点が当たってきた（Stafford & Canary, 1991）。しかし、Duck（1988）によれば、関係開始・発展・崩壊のプロセスやストラテジーは重要ではあるが、それ以上に多くの時間を私たちは関係の維持に費やしている。さらに、関係維持の段階は、関係開始・発展・崩壊と同じ特性を共有していたとしても、これらの段階とは区別して検討されねばならない。Gilbertson, Dindia, & Allen（1998）もまた、関係維持の段階を研究する必要性を主張している。満足のいく永続的な関係の維持がどれほど困難であるかは、離婚率の高さが証明しており、それゆえに、研究者には関係維持について理論的・実際的な理解に貢献することが求められると述べている。関係維持の段階で行われるコミュニケーションが、あまり注目されてこなかった理由は、あまりにも日常的、習慣的な行動が多くを占めるためだと考えられる。しかし、このような日常的、習慣的な行動の重要性を指摘する研究者は多い。

Duck, Rutt, Hurst, & Strejc（1991）は、これまで見過ごされがちであった日々の出来事や状況に目を向け、日常的に習慣となっているようなコミュニケーションを検討すべきだと述べている。そして、Duck & Pittman（1994）もまた、日常の習慣的な行動や会話の重要性を強調し、このような些細な行動こそが、関係を維持し、関係内での行動や体験を導くと述べている。さらに、

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生。
指導教官：吉田俊和教授

Duck & Pittman (1994) は、従来の自己開示研究を整理し、批判することで、日常的コミュニケーションを検討することの意義を次のように説明している。Jourard (1971) のいう自己開示は、精神的健康にとって大切なものであり、コミュニケーションというよりは、個人的な行為、個人特性のようなものとして捉えられている。しかし、自己開示は精神的健康のためという個人的な目的だけではなく、他者とのコミュニケーションスタイルや関係スタイルを形作るためにも行われ、個人が世界を見る見方を調整するためにも行われる。このような自己開示の目的は、日常の文脈の中でこそ捉えられるのだと述べている。

実際、親密な関係において行われるコミュニケーションでは、何気ない些細なやりとりが多くの部分を占めていることが予想できる。Duck & Miell (1986) によれば、友人同士で多くなされる会話は、たわいない非親密な会話である。また、Goldsmith & Baxter (1996) は、大学生が普段話している話題を日誌法により検討したところ、29のカテゴリー（発話事象）を見出し、「うわさ話」「雑談」などの日常の何気ない会話が全会話のおよそ半分を占めていることを示した。つまり、表面的な話題が普段の会話の大半を占めているということである。また、日常的コミュニケーションの機能や役割を指摘した研究もある。Duck et al. (1991) は、大学生の日常的な会話を日誌法により検討し、何気ない会話が、対人関係の良好な継続のサインであることを示した。さらに、家族や友人などとの会話よりも恋人との会話の方が、自分の考え方や行動などに変化が起こりやすいことも示した。日常的コミュニケーションが、恋愛関係において特に重要なことを意味する結果と考えられる。また、川上・川浦・古川・片山・杉森・鈴木 (2002) では、人は日常のおしゃべりの中で「楽しさ」「情報伝達と課題解決」「親密になれる」「人をコントロールする」などの、様々な効用を得ていることが示唆された。さらに、Emmers-Sommer (2004) は、恋人や友人との日常的な会話を日誌法により検討した結果、日常会話に対する満足度が高いほど、また日常会話がスムーズであるほど、相手に対する満足度や親密さが高くなることを示した。このような研究の動向を受けて、近年、関係維持の機能をもつようなコミュニケーション方略や習慣的な行動にも着目されるようになってきた (e.g. Ayres, 1983; Baxter & Dindia, 1990; Bell, Daly, & Gonzalez, 1987; Shea & Pearson, 1986)。

そこで、本稿では、関係維持の機能をもつコミュニケーションや習慣的な行動に焦点を当てた研究を概観する。まず、第3節では、関係メンテナンス行動に関する研究

を概観する。具体的には、メンテナンス行動としてどのような行動が検討されてきたのか、それらが関係の良好さに与える影響はどの程度かについて議論する。次に、メンテナンス行動研究では直接取り上げられていない行動であるが、日常的コミュニケーションとして重要と考えられる行動についても概観する。第4節では、日常的コミュニケーションの機能や役割を説明したモデルを紹介し、第5節で日本での研究の動向をまとめた。第6節では、日常的コミュニケーションの測定法として日誌法を取り上げ検討する。

第3節 日常的コミュニケーションを捉えようとした研究

日常のやりとりが、関係の構築や維持に役立つという視点での研究としては、まず、関係メンテナンス (relational maintenance) に関する研究が挙げられる。多くの研究者が独自の方略や行動を取り上げ検討している。そこで、本節では、まず、いくつかの関係メンテナンスに関する研究を概観したあと、Stafford & Canary (1991) に始まる一連の関係メンテナンス行動の研究を概観する。次に、メンテナンス行動研究では直接取り上げられていない行動であるが、日常的コミュニケーションとして重要と考えられる行動を取り上げる。具体的には、「タッチング」と「関係固有の表現型」の研究を概観する。

第1項 関係メンテナンス行動

関係メンテナンス行動を同定し、分類しようとした初期の研究にAyers (1983) がある。Ayers (1983) は、因子分析の結果、関係メンテナンスの3つの方略を提案している。1つ目は、「バランス（好意や情緒的なサポートを安定して与え、バランスを保つこと）」、2つ目は、「回避（関係を変化させようとする無視したり避けたりすること）」、3つ目は、「直接的表現」であった。さらに、Shea & Pearson (1986) は、Ayers (1983) の尺度を修正して用い、因子分析を行った結果、Ayers (1983) と同じ3因子を見出している。そして、この3つの方略を、M. L. Knappの関係発展の段階モデル (Knapp, 1984; Knapp & Vangelisti, 2004) に照らして解釈している。「バランス」は、関係発展期である「強化」「統合」の段階で用いられる方略に相当し、「回避」は関係衰退期である「境界化」「回避」「終焉」の段階で用いられる方略に相当する。そして、「直接的表現」は、相当する段階があるわけではないが、具体的な目的達成の方略だと解釈されている。つまり、「バランス」は関係発展期の方略、「回避」は衰退期の方略、

「直接的表現」は目的に応じて使用される方略だということである。

また, Ayers (1983), Shea & Pearson (1986) では, シナリオを用いた質問紙（場面想定法）によって, 方略の使用度が検討されているが, 両者に一貫した結果は得られていない。Ayers (1983) では, シナリオ上でパートナーが関係の進展に関してどのような意図をもっているかで, 3つの方略の使用頻度に違いがみられたが, Shea & Pearson (1986) においては, パートナーのもつ進展の意図よりも, 二者間の性別構成による影響の方が大きく, かつ「直接的表現」に対する影響のみが確認されるに留まっていた。一貫した結果が得られない理由としては, いずれの研究も場面想定法であるため生態学的妥当性を欠くこと, また, Ayers (1983) の対象者が大学の新入生なのに対し, Shea & Pearson (1986) では社会人であることなどが考えられる。

しかしながら, 両者の研究において, 同じ3つの方略が同定され, 関係発展との関連が考察されている点は評価できるだろう。ただし, 関係メンテナンス方略のすべてが3つの種類で包括できるのかという点には疑問が残る。特に, 「バランス」の項目をみると, 共通に興味あることについて話す, 軽い話題と深刻な話題のバランスを保つ, パートナーの気分を理解したりサポートしたりする, となっており, かなり多様な内容で構成されている。具体的にどのようなコミュニケーションをすることが関係メンテナンス方略となるのかが明確になるように, 方略を細分化すべきだと考えられる。そこで次に, 関係メンテナンス方略をさらに多くの種類に分類した研究をみる。

Dindia & Baxter (1987) は, 夫婦関係を対象に, 関係維持と修復の方略を自由記述形式の調査で収集している。その結果, 49の方略と, それらの上位に位置する12のカテゴリーを見出した。そのうち, カップルによく用いられていたカテゴリーは, 「向社会的方略」「セレモニー」「コミュニケーション方略（会話, 固有のコミュニケーション, 感情の共有など）」「共同活動（togetherness）」であった。これらの方略は, Ayres (1983) や Shea & Pearson (1986) では, 「バランス」として包括されてしまっていた関係メンテナンス方略と考えられ, これらの方略を抽出できた点に, この研究の意義があるだろう。さらに, Baxter & Dindia (1990) は, Dindia & Baxter (1987) を基に50の夫婦関係のメンテナンス方略を作成し, そこから3つの次元を抽出している。3つの次元とは, 建設的／破壊的な (constructive/destructive) コミュニケーションスタイル, 危機的状況での使用／満足な状況での使用 (ambivalence-

based versus satiation-based conditional use), 積極的／受動的 (proactivity/passivity) であった。

また, Dindia & Baxter (1987) は, ある程度良い状態の関係を維持する場合と, 悪化した関係を修復する場合とで, 用いられる方略が異なるかどうかについても検討しているが, ほとんどの方略がいずれの場合においても用いられていた。ただし, 「メタ・コミュニケーション方略」は主に修復のために用いられ、「異例・偶発性 (anti-rituals/spontaneity: 新しい今までにない活動をする)」は主に関係維持のために用いられていた。つまり, ここで同定されたほとんどの方略は, 関係維持の機能も, 関係修復の機能も両方とも備えているが, 一部いずれかの機能に特化した方略もあるということである。しかし, ここでは, 各方略が実際に関係維持や修復の機能を発揮しているのかどうかまでは検討されておらず,さらなる検討が期待される。

さらに, Dindia & Baxter (1987) は, 夫婦が使用した方略の種類と結婚期間や関係満足感との関連についても検討している。その結果, 結婚期間と方略の種類との間には負の相関を見出しつたが, 方略の種類と関係満足感との間には有意な相関はみられなかった。つまり, 結婚生活が長くなると夫婦間で用いられる方略の種類は減少するが, それは関係満足感が低くなることを意味するわけではないといえる。Dindia & Baxter (1987) が考察しているように, 結婚生活が長くなると, 少数の効果的な方略に頼ることができるようになるからだと考えられる。

このことを裏付ける研究として, 方略の種類ではなく使用頻度を検討した場合には, 関係満足感との関連がみられた研究を挙げることができる。Bell, Daly, & Gonzalez (1987) は, 夫婦間の親和や絆を維持するための方略 (affinity-maintenance) として28方略を見出した。これらの方略のうち, 誠実であること (faithfulness), 正直であること, 身体的な愛情表現 (physical affection) が, もっともよく用いられる方略であり, また, 言語的な愛情表現, 共感的な態度 (Sensitivity), 身体的な愛情表現, 開放性 (Openness) が, 妻の関係満足感との関連が高いことが示された。つまり, 少数の効果的な方略を多く用いることが, 関係満足感につながると考えられる。

以上, いくつかの関係メンテナンス方略に関する研究を概観してきたが, それぞれの研究者が独自に関係メンテナンス方略を同定しているため, 統一的な見解が得られにくい。それに対し, Stafford & Canary (1991) によって開発された関係メンテナンス方略の尺度は, その後に複数の研究が積み重ねられてきている。この方略

は、「肯定性 (positivity)」「開放性 (openness)」「保証行動 (assurances)」「ネットワーク (network)」「課題の共有 (sharing tasks)」の 5 つの側面から成っている。Stafford & Canary (1991) は、この 5 つの側面が、Ayres (1983), Baxter & Dindia (1990), Bell, Daly, & Gonzalez (1987), Braiker & Kelley (1979), Dindia & Baxter (1987) らがこれまで見出してきた関係メンテナンス方略を包括、集約したものであると述べている。「肯定性」とは、パートナーとの気持ちのよい肯定的で受け入れるような関わり合いであり、「開放性」とは、二人の関係について率直に話し合い自分の要望を示すことである。「保証行動」とは、二人の関係の永続性を確認し合うような行動であり、具体的には、相手に対する誠実さを示す、二人の関係の将来性を示すなどが含まれる。「ネットワーク」とは、親類や共通の友人と関わり合ったり、頼ったりすることであり、「課題の共有」とは、家事などのやるべき仕事を分担したり、二人が直面する課題を共有したりすることである。

また、Stafford & Canary (1991) は、5 つの関係メンテナンス方略の使用度が、関係のタイプ（夫婦関係、婚約関係、真剣なデート関係、デート関係）によって影響されることを示した。例えば、婚約関係と真剣なデート関係では、「肯定性」や「開放性」をより多く使用しており、夫婦関係においては「ネットワーク」が多く使用されていた。また、関係メンテナンス方略の使用度は、性別によっても弱い影響を受けており、男性の方が女性よりも「肯定性」「保証行動」「ネットワーク」をより多く報告していた。一般的には女性の方が対人関係に対する志向が高いため、関係メンテナンス方略も使用しやすいと予想されるが、Stafford & Canary (1991) では、そのような性役割とは反対の結果が得られたといえる。性役割に基づくコミュニケーション行動の性差が、親密な異性間の対人行動ではみられなくなるという結果は、自己開示でもみられている (Dindia, 2002)。対異性の対人行動は、一般的な対人行動とはかなり異なる特徴をもつと考えられる。しかし、Stafford & Canary (1991) は、この性差の結果について、性役割が浸透しているがゆえの認知の歪みが原因である可能性も指摘している。つまり、男性は関係メンテナンス方略を使用しにくいという信念が強くあるため、男性が少しでも関係メンテナンス方略を使用したならば、それが過度に評価されてしまうということである。

また、Stafford & Canary (1991) は、関係メンテナンス方略の関係の良好さに対する予測力を検討している。関係の良好さとしては、相互性のコントロール

(control mutuality)、コミットメント、好意、関係満足感が指標として用いられたが、そのいずれに対しても、「肯定性」「保証行動」「課題の共有」が一貫して強い予測力をもっていた。特に、「課題の共有」はこれまでの研究ではあまり注目されていない関係メンテナンス方略であるにも関わらず、強い予測力が見出され、興味深い結果といえる。また、「開放性」の予測力が弱かったという結果も興味深く、Stafford & Canary (1991) は、「肯定性」や「保証行動」という関係メンテナンス方略の要素を取り除いてしまったあとの「開放性」では関係の良好さに対して効果がないと解釈できると述べている。

次に、Canary & Stafford (1992) は、Stafford & Canary (1991) の関係メンテナンス方略の尺度に、若干の項目を追加し検討を加えている。この研究では、衡平理論の視点を導入し、関係の衡平性が関係メンテナンス方略の使用とどのような関連があるかを検討している。その結果、全体的には、関係が衡平であると認知しているほど、関係メンテナンス方略をよく用い、また、パートナーも関係メンテナンス方略をよく用いていると知覚していた。さらに、関係メンテナンス方略は関係の良好さの指標（相互性のコントロール、好意、コミットメント）を予測していた。

続いて、Stafford, Dainton, & Haas (2000) でも、Stafford & Canary (1991) によって開発された尺度を利用して検討を行っている。ここでは、さらに「アドバイス」「葛藤対処」の 2 側面を加えた関係メンテナンス行動の尺度を用いていた。その結果、生物学的な性別よりも、性役割の方が関係メンテナンス行動の使用に対し影響力が大きく、女性性の高さが 7 側面すべての関係メンテナンス行動に対しもっとも予測力が高くなっていた。また、関係の良好さの指標に対して「保証行動」が一貫して強い予測力をもっていた。

Stafford (2003) は、一連の研究結果をまとめ、複数の関係の良好さの指標に対し、もっとも一貫して予測力をもっているのが「肯定性」と「保証行動」であると述べている。そして、メンテナンス行動として言及されることの多い「開放性」は、関係のメンテナンスに対する効果が確認されたりされなかつたりと、見出される結果に搖らぎがあると述べている。

さらに現在では、関係メンテナンス行動が、概念的には 2 種類に分類することができるという主張のもとに研究が行われている (Dainton & Stafford, 1993; Stafford et al., 2000)。1 つは、関係維持という目的を明確に意識して行われる方略的な (strategic) 行動のことであり、もう 1 つは、関係維持という目的を明確にもっているわけではない習慣的な (routine,

nonstrategic) 行動のことである。それまでの多くの研究では、関係メンテナンスを方略・ストラテジーとして定義してきた。例えば、Ayres (1983) や Shea & Pearson (1986) は、関係メンテナンスを関わり合うという意図に基づいて相互作用のパターンを作り出し受け入れていく過程として定義している。また、Bell, Daly, & Gonzalez (1987) は、パートナー同士がより好意的になれるための方略として定義し、Dindia & Baxter (1987) は、関係悪化防止と関係修復という目的のための方略として定義している。さらに、Canary & Stafford (1992) や Stafford & Canary (1991) は、満足のいく関係を維持するための努力として定義している。いずれも、関係メンテナンスという明確な意図をもった方略であるという意味合いが強い。しかし、使用者がそれほど意識せずに行動であっても、関係メンテナンスという機能をもつ行動があり、そのような習慣的な行動こそ検討されるべきであるという主張もなされている (Dainton & Stafford, 1993)。Dainton & Stafford (1993) は、「関係メンテナンス方略」という用語では、方略的な行動しか想起されないため、習慣的な行動も含めた意味で用いるために、「関係メンテナンス行動」という用語を用いている。本稿でもそれに倣い、包括的な意味をさす場合には、「関係メンテナンス行動」を用いている。

この考えに基づき、Dainton & Stafford (1993) は、習慣的な行動に焦点を当てた検討を行っている。その結果、もっともよく使用される行動として報告されたのは、先行研究ではまれに用いられるにすぎなかった「課題の共有」であった。これは、習慣的な関係メンテナンス行動に焦点を当てたからこそ見出された結果だといえる。また、典型的な課題としては、家事が挙げられていた。家事の分担は関係を維持する方略としては報告されにくい行動であるが、家事の分担がうまくいくことは関係満足感にとっても重要であるといわれている (Zietlow & Sillars, 1988)。

しかし、Stafford (2003) は、方略的か習慣的かの区別は、関係維持の意図をもつか否かであり、実際にはこの2種類を弁別することは困難であるとしている。上述の Stafford et al. (2000) でも、習慣的な行動の視点を導入してはいるものの、方略的な行動と区別して測定しているのではなく、関係メンテナンス行動尺度は両者を捉える尺度であるとみなして、検討を加えているのである。それに対し、Dainton & Aylor (2002) は、教示の仕方によっては二種類の関係メンテナンス行動を弁別できることを示唆した。Dainton & Aylor (2002) は、同じ関係メンテナンス行動に対して、方略的に用いられ

る程度と習慣的に用いられる程度の2つを回答させ、これらの回答間の相関が低いことを見出している。

習慣的に用いられる関係メンテナンス行動の重要性は、多くの研究者の指摘するところである。Stafford (2003) が主張するように、実際には方略との弁別が困難であることは確かであるが、仮に、方略的もしくは習慣的のいずれかの形式でのみ使用されることが多い行動があるとすれば、弁別して測定することが可能だろう。ただし、選択された行動のみすべての関係メンテナンス行動を網羅しているのかという内容的妥当性の問題を孕むことになる。Dainton & Aylor (2002) の手法を含めて、今後の検討が期待される。

以上に述べた、Stafford & Canary (1991) に始まる一連の研究は、恋愛・夫婦関係ではない、他の関係を対象とした研究へも展開されつつある。例えば、友人や家族関係の研究や (Canary, Stafford, Hause, & Wallace, 1993; Messman, Canary, & Hause, 2000)、同性の恋愛関係を対象とした研究 (Haas & Stafford, 1998) などが挙げられる。

第2項 その他の日常的コミュニケーション

Stafford & Canary (1991) によって同定された関係メンテナンス行動の5つの側面は、関係を維持する方略をうまく捉えていると考えられるが、Dainton & Stafford (1993) や Stafford et al. (2000) が習慣的な行動にも焦点を当てた場合には、さらに別の側面も追加されている。やはり5つの側面以外にもまだ重要な日常的コミュニケーションは存在していると考えられる。

Goldsmith & Baxter (1996) によると、恋愛関係では日常の相互作用において「愛情を表現する」ことがかなり多く行われていた。相手への愛情や親密感を伝達することは、対人コミュニケーションの主要な目的の1つであり (大坊, 1998)、恋愛・夫婦関係にとっても重要なコミュニケーションであると考えられる。その代表的なコミュニケーション方法としては、直接相手に触れることがある「タッチング」が挙げられる。「タッching」は、主に、恋愛・夫婦間で行われる独特の行動であり、非言語的行動の中でも、関係の親密さを示す代表的な行動として考えられている (Patterson, 1988)。また、愛情表現といえば「愛している」などの言葉が想定されやすいが、必ずしも直接的な表現だけが用いられるわけではない。相手に対し特別な愛称を、ただ単に用いることが愛情表現になる場合もある。どの表現の形を選ぶかは、その二人がこれまでどのようなコミュニケーションを行ってきたかによって決定されると考えられる。つまり、二人の間にはその二人に特別な言葉やフレーズ、

非言語的なサインなどが存在するのである。これは「関係固有の表現型 (personal idioms)」と呼ばれている。そこで、本節では、関係メンテナンス行動の5側面以外の日常的コミュニケーションとして、「タッチング」と「関係固有の表現型」を取り上げ、関連する研究を概観する。

1 タッチング

タッチングを検討した初期の研究に、Jourard (1966) がある。Jourard (1966) は、関係のタイプによるタッチングの違いを検討している。その結果、両親や同性の友人よりも異性の友人の方が、より多くの身体領域においてタッチングを経験しており、ほとんどの場合、タッチングは身体の上半身に対しなされていた。Rosenfeld, Kartus, & Ray (1976) は、Jourard (1966) を追試し、同様の結果を見出している。ただし、Jourard (1966) では扱われなかった異性のカップルを対象にし、異性のカップルがもっと多くの領域においてタッチングを経験していたことを示した。このように、初期のタッチングの研究は、関係のタイプ間の違いを検討した研究が多かった。その後、研究者の関心は、関係のタイプではなく、関係の進展段階による違いに移っていった。

タッチングが関係の進展とどのような関連があるのかについては、2つの予測が成り立つ (Emmers & Dindia, 1995)。1つは、直線的増加である。Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論は、関係の進展に伴って自己開示の内容は広く深い領域へと変化していくという直線的関係を仮定している。この理論は、非言語的行動についても同様の進展過程を経ると仮定しているため、タッチングについても直線的増加が予測される。また、M. L. Knappの関係発展の段階モデル (Knapp, 1984; Knapp & Vangelisti, 2004) においても、関係の進展はコミュニケーションの親密化と直線的関係にあると仮定しており、やはりタッチングの直線的増加が予測される。もう1つは、曲線的变化である。社会的浸透理論が仮定する單一次元における単調増加に対しては、疑問視する研究者も多い (Altman, Vinsel, & Brown, 1981; Berg & Clark, 1986; 山中, 1994)。また、Duck & Miell (1986) は、同性異性関係を対象に日々の相互作用を記述させた結果、関係の進展は自動的・直線的というよりは、むしろ直線的ではなく不確定・不安定であることを示している。これら2つの予測のうち、いずれが支持されるのかについて示した研究は、以下の2つが挙げられる。

Guerrero & Andersen (1991) は、異性間のカップ

ルを対象に、公の場におけるタッチング (public touch) を観察した。その結果、タッチングの量は、軽い付き合い (casually dating) よりも真剣な付き合い (seriously dating) において多く、そして、真剣な付き合いよりも夫婦関係において少ないという、曲線的関係を見出した。つまり、上述の2つ目の予測が支持されたことになる。しかし、ここでは、公の場でのタッチングしか観察しておらず、二人だけの私的な状況におけるタッチング (private touch) が除外されており、タッチングのすべてが検討されているとはいえない (Emmers & Dindia, 1995)。その点を踏まえて、Emmers & Dindia (1995) は、恋愛関係にある人を対象に、タッチングの量と関係の段階や性別との関係について検討している。回答者には過去1ヶ月のタッチングを思い出し、その頻度を回答するよう教示した。その結果、回答者自身がタッチングすることも、パートナーからタッチングされることも、いずれも、軽い付き合いや夫婦関係よりも、真剣な付き合いにおいてもっとも多いという曲線的関係が示された。私的状況でのタッチングも、公の場でのタッチング (Guerrero & Andersen, 1991) と同様の傾向であり、やはり2つ目の予測が支持されたといえる。また、性差は確認されておらず、タッチングの量が関係の進展に対し曲線的関係にあることは性別を問わない現象であると考察されている。

以上の研究はいずれも、タッチングの量という量的側面を検討の対象にしているが、タッチングの質的側面を検討することも可能である。タッチングの質的側面としては、タッチングによって伝達される意味の検討が考えられ、T. D. Nguyen, R. Heslin, M. L. Nguyen (1975) や M. L. Nguyen, R. Heslin, T. D. Nguyen (1976) によってなされている。その結果、タッチングは、愛情の表現や喜びとみなされたり、性的衝動やパパ活への侵入とみなされたりすることが示された。さらに、パートナーからのタッチングにどのような意味を感じるかは、既婚・未婚の別や性別によって異なることが示されている。M. L. Nguyen et al. (1976) によれば、既婚者は未婚者よりも、タッチングを愛情、友情、喜びとみなし、また性的衝動を伝達するものと考えていた。既婚男性は、未婚男性や既婚女性よりも、性的な身体部位へのタッチングを愛情の表現や喜びとはみなさないことも示された。

T. D. Nguyen et al. (1975) や M. L. Nguyen et al. (1976) では、関係の進展段階として既婚・未婚しか区別してはいない。しかし、Guerrero & Andersen (1991) や Emmers & Dindia (1995) の結果と合わせて考えると、次のような仮説が成り立つだろう。未婚の

真剣な付き合いの段階では、タッチングの量が多いが愛情の伝達度は低い。それに対し、夫婦関係においては、タッチングの量は少なくなるが、一度のやりとりで伝達される質が豊富になる。しかし、これまでの研究では、タッチングと関係の良好さの指標（満足感や親密感など）との関連をみていないため、タッチングの量と質が関係の良好さとどのような関連をもつのかについては不明なままであり、今後の検討が待たれる。

2 関係固有の表現型

Hopper, Knapp, & Scott (1981) は、二人に独特な意味をもつ言葉・フレーズ・非言語的なサインに焦点を当て、これを関係固有の表現型 (personal idioms) と呼んで検討している。具体的には、夫婦関係や同棲しているカップルを対象に、関係固有の表現型にはどのようなものがあるのか、また、それはどのように作られてきたのかなどについて尋ねる面接調査を行っている。その結果、8つのカテゴリー、「お互いのニックネーム」「愛情の表現」「他者へのラベル」「不満の表明」「行動の合図 (requests and routines)」「性的な事柄の婉曲な表現」「セックスへの誘い文句」「からかいの表現 (teasing insults)」を見出した。なぜ、このような表現型が恋愛や夫婦関係で発展するのかについて、Hopper et al. (1981) は、関係固有の表現型を用いることが、自分たち以外の人々との間に境界線を引き、二人の間のつながりやカップルとしてのアイデンティティを作り出す効果をもつからであると説明している。その考えを支持する結果も報告された。関係固有の表現型は、二人のつながりを強固にしていくべき時期と考えられる、デートをしている時期から結婚3年目くらいまでにできたものが多く、また、自分たちの関係にポジティブな影響があったと認識している人も多かったのである。この研究によって、関係固有の表現型が、実際に恋愛関係や夫婦関係において使用されており、関係に対し良い効果をもつことが示唆されたといえる。

さらに、8つのカテゴリーのうち「愛情の表現」はもっともよく用いられ、次に、「からかいの表現」もよく用いられていた。「からかいの表現」は、相手をからかう、ばかにすることを、冗談交じりに軽く伝達することである。いずれも、直接言葉にすることを躊躇してしまいがちな事柄を、別の形式に置き替え間接的に表現することで、上手く伝達していると考えられる。本節の冒頭で、愛情や親密感を伝達するものとして関係固有の表現型を紹介したが、関係固有の表現型は愛情や親密感を伝達するだけではなく、不満や批判を伝えたり、何らかの行動の合図であったりもすることがわかる。つまり、関係固

有の表現型にはかなり具体的なメッセージをもつものもあり、短い言葉で相手に意図が伝わるという意味で、コミュニケーションを円滑にする役割をもっている。これは、関係固有の表現型のもう1つの機能だと考えられる。

しかし、Hopper et al. (1981) では、満足感や親密感などの関係の良好さの指標を測定したわけではなく、関係固有の表現型の効果について実証的に検討されてはいない。この点について検討したのが、Bell, Buerkel-Rothfuss, & Gore (1987) である。恋愛関係にある人を対象に、実際に使用している関係固有の表現型を書かせ、それを Hopper et al. (1981) の分類に従って判別した。その結果、関係固有の表現型をたくさん用いているほど、相手に対する愛情や親密さが高く、将来結婚する可能性も高いと思われていることが示された。また、用いている表現型の種類が多いほど、愛情、親密さ、結婚の可能性が高くなるという結果も見出し、男女ともに「性的な事柄の婉曲な表現」が、もっとも愛情と高い関連を示していることも見出した。この研究によって、関係固有の表現型の効果が実証的なデータによって示されたといえるだろう。さらに、興味深い結果としては、Hopper et al. (1981) では、関係固有の表現型のほとんどが私的な状況での使用であったのが、Bell, Buerkel-Rothfuss, & Gore (1987) では、かなりの割合で公の場で使用されていたことである。この結果もまた、関係固有の表現型が二人の一体感や連帯感を作り出す効果を示していると考えられる。つまり、関係固有の表現型を公の場で使用することは、二人の特別な絆を周囲の人々に示すことになる。周囲の人々からも自分たちの関係の絆を認識されることによって、さらに二人の一体感や連帯感が高まると考えられる。

その後、Bruess & Pearson (1993) は、夫婦関係のライフサイクルを結婚年数や子どもの有無などによって4つの段階に分け、それぞれの段階毎に関係固有の表現型と満足感との関連を検討している。結婚5年以内で子どもがいない第1段階では、報告される関係固有の表現型の個数が多く、また、子どもが学童期である第3段階において、関係固有の表現型の個数と満足感との間に正の相関がみられていた。関係固有の表現型は、関係の進展期や子育て期において独自の機能をもつ可能性が示唆されたといえる。ただし、この研究は、横断的な資料に基づいており、段階による違いが世代差である可能性もあり、また、各段階に含まれる調査対象者の人数に偏りがみられているため、さらなる検討が必要だろう。

関係固有の表現型は、恋愛関係や夫婦関係におけるコミュニケーションとして注目されてきたが、それ以外の関係での検討もなされている。Bell & Healey (1992)

は、友人関係における関係固有の表現型を、先行研究を参考に独自に分類し、これらが友人間の連帯感 (solidarity) と有意な正の関連をもつことを見出している。関係固有の表現型は恋愛関係や夫婦関係に特有のものではなく、それ以外の親密な関係においても、同様の機能をもっていると考えられる。

また、関係固有の表現型をさらに広い概念の中の 1 つとして扱っている研究もある。Baxter (1987) は、自分たちの関係に独特だと思わせるもの、特別な意味をもつ現象をシンボルと呼び、その分類や機能について検討している。シンボルを自由記述により収集し、「言動などの行為 (behavioral actions)」「過去の出来事や時間 (prior events/times)」「物理的な対象物 (physical objects)」「特別な場所 (special places)」「文化的な所産 (cultural artefacts)」の 5 つの分類を見出した。5 つのうちの 1 つ目、「言動などの行為」に関係固有の表現型が含まれると考えられる。この「言動などの行為」がもっとも報告されることの多いシンボルであったことから、関係固有の表現型の重要性が示唆されたといえる。また、Baxter (1987) は、シンボルの機能をどのように認識しているかについても尋ねている。その結果、よく報告された機能は「親密感の表出」「親交・連帯感の促進」であった。この機能は、関係固有の表現型の機能と同一のものである。シンボルには、関係固有の表現型には含まれていない、二人にとって特別な物や思い出が含まれているが、その二人に固有のものであること、特別なものであること、という特徴は共通している。関係固有の表現型にしても、シンボルにしても、自分たちの関係に固有の形式であることが重要であり、そのことが二人の一体感や連帯感を高めていると考えられる。

第 4 節 日常的コミュニケーションの機能を説明する理論

近年、日常的コミュニケーションに注目が集まるようになり、関係の良好さに対する効果も実証されてきている。実証データの蓄積も重要であるが、日常的コミュニケーションの役割や機能を包括的に説明するモデルの構築もまた必須であると考えられる。このモデルとしては、Wood (1982) の関係固有の文化 (relational culture) と、Sigman (1991) の関係継続構築ユニット (relational continuity construction units: RCCUs) を挙げることができるだろう。

第 1 項 関係固有の文化

日常的コミュニケーションが関係の良好さに寄与する

理由の 1 つとして次のようなことが考えられる。日常的な話題の中にも、個人の価値観、志向、考え方などが反映されており、直接、価値観などを言葉にしなくても、普段の会話を通してお互いを理解していくことができる。これによって、お互いの行動の意味を二人以外の他人よりもより良く理解できる、相手の行動がより良く予測できると考えられる。つまり、二人に固有のコミュニケーションの理解と、固有のコミュニケーションパターンの形成がなされるためだと考えられる。

このことを文化という用語を用いて説明しているのが、Wood (1982) の関係固有の文化である。Wood (1982) によれば、関係固有の文化とは二者関係の発展や維持のプロセスにおいて形成されていく、その二者関係に特有な意味のシステムのことである。その関係内で行われる会話や行為を独自の様式で変換するシステムのことであり、コミュニケーションを通して形成される。関係固有の文化は、その関係内での何かを理解する方法や行動する方法に影響を及ぼし、また関係外の世界を理解する際にも影響すると考えられている。コミュニケーションの基本的な仕組みに照らして、説明すると次のようになるだろう。コミュニケーションが成立するためには、個人の経験や伝達したい内容を主観的な方法で変換するため(記号化)、受け手が同じ変換方法(解読)をもっていないと、その個人の経験や伝達内容を理解することができない。そして、その変換方法は個人のもつ価値観や様々な既存知識によって規定される。つまり、メッセージの変換方法とそれを規定する価値観や既存知識など、これらを含めたものをシステムと呼ぶならば、ある関係に属する人々の間で作り上げられた共通のシステムが関係固有の文化であると考えられる。先述の、関係固有の表現型の構築や使用が可能なのは、二人がこの共通のシステムをもつためである。また、Dainton & Stafford (1993) では、関係メンテナンス行動についてパートナー同士の回答がかなり類似していることが示されたが、これは共通のシステムが構築してきた結果、行動面においてもパートナー間が類似してきたためと考えられる。Duck & Barnes (1992) もまた、パートナー同士は共通の意味のシステムを構築するなかで類似していくと述べており、同様の現象を説明している。さらに、本稿で取り上げていない行動であるが、Burleson & Denton (1992) は、夫婦同士の社会的・コミュニケーションスキルがかなり類似していることを見出している。

関係固有の文化という概念に類似の概念もいくつか存在する。たとえば、Lewis (1972) は「関係内で共有された文化 (shared culture of relationships)」という概念を、Baxter (1987) は「小さな文化 (mini-

culture)」「関係性の文化 (relationship culture)」という概念を使用している。これらは、用語そのものは異なっているものの、「二人の見知らぬ他者が、いかにして一体となっていくのか、いかにして調和のとれた二人へとなっていくのか」を説明しようとしているという点で共通している。複数の用語が用いられると、概念の混乱を招く恐れもあるが、それだけ多くの研究者が同様の現象に着目しているということでもあり、関係固有の文化という考え方の重要性が示唆されているともいえるだろう。

第2項 関係継続構築ユニット (RCCUs)

Sigman (1991) の関係継続構築ユニット (relational continuity construction units: RCCUs) とは、カップルと一緒にすごせない時間を埋めるために行う行為のことである。Sigman (1991)によれば、カップルが実際に接していない間でも、「関係」は続いている、作られているのである、それは RCCUs によって行われている。この RCCUs には 3 つのタイプがある。1 つ目は、prospective units と呼ばれ、物理的な別離の前に行われる行為であり、別離の期間や意味、そしてまた戻ってくる意志を確認することである。例えば、次に会う計画を立てる、エンゲージリングなどの記念の品をもつ、身の回りの品を置いておくなどの痕跡を残すことが含まれる。2 つ目は、introspective units と呼ばれ、別離の最中に行われる行為のことであり、別離の間における関係の継続性を作り出すことである。例えば、結婚指輪を身に付けることやメディアを介したコミュニケーションをすることなどが含まれる。3 つ目は、retrospective units と呼ばれ、再会時に行われる行為であり、あいさつや会っていない間の期間に起こった出来事の報告などが含まれる。Vangelisti & Banski (1993) によれば、カップルが離れている間にそれぞれが経験した出来事を、相手と話し合うこと(デブリーフィング会話: debriefing conversations)が、二人の連帯感を強くる。確かに、Vangelisti & Banski (1993) では、このデブリーフィング会話に費やす時間の長いカップルほど関係満足感が高くなることを見出している。

Sigman (1991) に従って RCCUs を測定する尺度を構成し、検討した研究もある。Gilbertson et al. (1998) は、夫婦関係もしくは同棲しているカップルを対象に調査した結果、女性の RCCUs はすべて、女性自身の関係満足感と有意な正の相関がみられ、女性の prospective units と retrospective units は、男性の関係満足感と有意な正の相関がみられた。また、一緒にいる時間と関係満足感は正の相関があったが、この一緒

にいる時間を統制した上で RCCUs と関係満足感との関連も検討している。その結果、prospective units は男女共に、女性の関係満足感を予測し、さらに女性の prospective units は、男性の関係満足感も予測していた。RCCUs 自体に性差はないが、女性の RCCUs の方が、自他両方の関係満足感に対し影響力が大きいことが示されたといえる。

恋愛関係や夫婦関係にある二人でも、常に一緒にいて時間を過ごすわけではない。それぞれが、自分の仕事をもち、独自のネットワークを有しているため、実際には多くの時間を離れて過ごしているとも考えられる。独自の世界にいる間は、二人の関係に何の意味ももたないかというとそうではないと考えるのが、RCCUs の考え方である。RCCUs に相当すると考えられる行動の多くは、日常的コミュニケーションとしても同定されてきた行動である。例えば、prospective units の「次に会う計画を立てる」や、retrospective units の「会っていない間の期間に起こった出来事の報告」は、Goldsmith & Baxter (1996) が日常の相互作用として同定した行動の中でも、かなり多く行われていた行動である。また、introspective units の「結婚指輪を身に付けること」は、Baxter (1987) のシンボルに含まれる。このように、日常的コミュニケーションのある側面は RCCUs だと考えることも可能であり、日常的コミュニケーションの役割や機能を考える上で、RCCUs の考え方は有用であるといえるだろう。

第5節 日本の研究

立脇・松井・比嘉 (2005) によれば、日本の恋愛研究は、恋愛相手や恋愛関係に対する感情や評価に関する研究、恋愛や異性交際中の二者間で行われる行動に関する研究、恋愛特有の態度や認知に関する研究、恋愛と関連する要因についての研究の4つに分類される。そのうち、二者間で行われる行動に焦点を当てた研究は、2 つ目の研究分野である。1995 年以降にさかんになってきたものの、それほど多くはない。研究内容から、親密化行動 (e.g. 久保, 1993; 松井, 1990, 1993) の研究、言語・非言語コミュニケーションの研究 (e.g. 大坊, 1990; 和田, 1996), 対処行動の研究 (e.g. 相馬・山内・浦, 2003; 和田, 2000) にさらに 3 分類される。立脇・松井・比嘉 (2005) のレビューをみても分かる通り、恋愛関係における具体的なコミュニケーション行動に焦点を当てた研究はほとんどなく、日常のコミュニケーションを捉えた研究といえば、自己開示を検討した研究のみである。それ以外は、葛藤生起時という特別な状況化での対処行動を捉えた研究、恋愛関係で行われる行動を包括的に測

定する研究にとどまる。

対処行動の研究では、和田（2000）が恋愛関係崩壊への対処行動や感情反応、崩壊後の行動について検討している。その結果、恋愛関係が進展していた者ほど、崩壊時に説得・話し合い行動が多くとられ、苦悩が強く、後悔・悲痛行動と未練行動が多かったことが示された。また、相馬他（2003）では、恋人・配偶者との葛藤時の対処行動について検討している。その結果、パートナー以外のサポート源からもサポートを知覚でき、かつ交際期間が長い場合に、破壊的な対処行動を抑制することが示された。行動を包括的に捉えた研究としては、堀毛（1994）の異性関係スキルを扱った研究が挙げられる。異性関係スキルは、対人コミュニケーション全般に関わる基本スキルと関連がみられ、また、恋愛関係の進展や失恋体験によって基本スキルが向上することが示されている。

一方、日本の夫婦関係の研究は、「フェイスシート」の既婚・未婚の区別程度にしか注意を払ってこず、関係のダイナミクスそのものを研究の対象には考えてこなかった傾向がある（柏木、2003；数井、1998）。2000年代に入って、コミュニケーション行動に焦点を当てた研究も見受けられるようになってきたが、コミュニケーション行動を包括的に扱う研究であり（平山・柏木、2001）、やはり具体的な日常的コミュニケーションを捉えた研究はほとんどない。

数少ない具体的なコミュニケーションを扱った研究としては、中村（1991）の愛情を規定する要因の研究、桜庭（1995）の恋愛関係における自己開示と親密感との関連をみた研究、多川・吉田（印刷中）の日常的コミュニケーションを扱った研究を挙げることができる。中村（1991）では、自他の類似性、自己開示、メタ・コミュニケーションといった要因が、異性関係の発展・持続に影響することが示唆され、特に自己開示の役割が強調されている。また、桜庭（1995）は、恋愛関係における自己開示をさらに詳細に検討している。その結果、恋愛関係における自己開示は6因子（内面的開示、表面的開示、恋愛エピソード開示、プライバシー開示、社会的開示、宗教的開示）に分類され、恋愛相手への親密感は、内面的開示・恋愛エピソード開示（恋愛や過去の経験に関する話）と正の相関をもち、交際期間は、プライバシー開示（容姿や体型、家庭、健康の話）と正の相関をもつことを示した。内面的開示が親密感に寄与することは、従来の自己開示の研究と整合する結果といえる。しかし、中村（1991）や桜庭（1995）は自己開示の重要性を示唆するものの、日常的コミュニケーションという視点で研究が行われていない。それに対し、多川・吉田（印刷中）

は、日常の些細なコミュニケーションに着目し、関係の良好さとの関連を検討している。その結果、日常的コミュニケーションの中でも、「日常的な報告（毎日の出来事や周囲の状況を相手に話すこと）」「独特な言葉使い（関係固有の言葉を使用すること）」「相手の対応の認知（相手の自分に対する態度を肯定的だと認知すること）」が、愛情に対し有意な影響をもつことが確認された。特に、「日常的な報告」や「独特な言葉使い」は、先述の関係メンテナンス行動、関係固有の表現型、RCCUsに関する議論に対応するコミュニケーションであり、これらの行動の効果が示されたことは意義深いものと考えられる。本稿で概観したように、多くの研究者が日常的コミュニケーションに注目するようになってきており、日本においても日常的コミュニケーションを検討する研究がさらに期待される。

第6節 日常的コミュニケーションを捉える日誌法とその問題点

本稿で取り上げた研究の多くは、コミュニケーションを質問紙法によって測定している。しかし、そこで得られた結果は、回答者の本来の行動傾向を反映しているとは限らない。Sypher（1980）は、項目間の相関が実際の行動を反映しているというよりも、言葉の意味上の類似度を反映しているかもしれないことを十分に認識すべきだと主張している。さらに、日常的コミュニケーションはたわいない習慣的なコミュニケーションであるため、人々の記憶には残りにくい可能性がある。そのため、ある一時点において回顧法的に回答させるだけでは、日常的コミュニケーションを捉えることが困難であるとも考えられる。その点を克服するために利用されている手法が日誌法（dairy method）である。

Wheeler & Nezlek（1977）は、日常生活での様々な人との相互作用を測定するために、RIR（Rochester Interaction Record）を開発した。この方法は、2週の間に経験した相互作用を参加者自身に、毎日記録させるというものである。記録の対象となるのは、10分以上続いた相互作用であり、一日のうちに数回の相互作用があれば、それらひとつづつについて、あらかじめ設定された項目に沿って記録していく。日誌法は、研究の目的に応じて、記録する期間や評定項目が変更される。Duck et al.（1991）もRIRをもとに、独自の日誌法であるICR（Iowa Communication Record）を開発している。具体的には、相互作用1つずつについて、その時の感情や評価などを尋ねている。また、Gudykunst & Shapiro（1996）は、ICRの改訂版としてRICR（Revised Iowa Communication Record）

を開発している。毎日、相互作用を記録させるという点では同じであり、このような手法を、総称して、日誌法と呼ぶ。

この日誌法を用いて、日常的コミュニケーションを検討した研究はいくつか存在する。第2節で紹介した研究にも日誌法が採用されている。Duck et al. (1991) は、ICR によって日常的に行われるコミュニケーションを評価させた研究である。得られた回答に対し、因子分析を行った結果、日常の会話を評価する側面として、コミュニケーションの質、コミュニケーションの価値、自分の考え方や行動等への影響、相互作用のコントロールの4因子が見出された。ただし、ここでは日常会話を評価させたにすぎず、具体的な会話の中身は不明のままであった。それに対し、Goldsmith & Baxter (1996) は、まず、大学生が普段話している話題を分類し、その後日誌法を用いて2週間会話の記録をとらせ、会話の内容がどの話題にあてはまるかを選択させた。その結果、「うわさ話」「雑談」「冗談」などの表面的な話題が全会話のおよそ半分を占めていることを示した。この研究は、日常的コミュニケーションの具体的な内容を明らかにし、日常的コミュニケーションの重要性を示唆したという意味で有用な知見を提供したといえる。さらに、Emmers-Sommer (2004) は、日誌法をコミュニケーションの量と質を区別して検討できる手法であるとし、コミュニケーションと満足感や親密さとの関連を検討している。その結果、コミュニケーションの量より質の方が、満足感や親密さとの関連が強いことが示されている。また、日誌法を用いた縦断研究も存在する。Fitzpatrick & Sollie (1999) は、関係性に関わる価値観や信念、RIR による指標が、満足感や安定性（6ヶ月後の存続）に寄与するかどうかを検討している。その結果、安定していた（6ヶ月後に存続していた）カップルはそうでないカップルよりも、アタッチメント動機（出来る限りパートナーと一緒にいたい）、肯定的な社会情緒的行動（パートナーを承認したり誉めたりする）、自己開示が有意に多く報告されていたことを見出した。また、日誌法を用いた研究は、恋愛や夫婦関係以外の研究でも用いられており、日常の相互作用（RIR）と主観的幸福感との関連を検討したもの（牧野・田上, 1998 ; Nezlek, Richardson, Green, & Schatten-Jones, 2002）や、アタッチメントスタイルとの関連を検討したものもある（Kafetsios & Nezlek, 2002）。

日誌法の最大の利点は、やはり、コミュニケーションが生じたその日に記録せるため、回顧法によるバイアスが少ないとある。コミュニケーションの頻度、誰とどのようなコミュニケーションであったのかなどに

ついて、より正確な測定が可能であり、また、たわいもないやりとりも取りこぼさずに測定できる。2つ目の利点としては、Emmers-Sommer (2004) が主張するように、コミュニケーションの量とコミュニケーションの質を区別して検討できる点である。量としては、コミュニケーションに要した時間などが挙げられるが、これと、コミュニケーションがもつ機能や効果の評価とを区別して検討できる。先述のタッピングや関係固有の表現型の研究において、量と質（機能）についての議論があったが、この点を検討するには日誌法は有効だと考えられる。一方、日誌法の最大の欠点は、実施に際して回答者へかける多大な負担である。回答者への十分な説明がなされることはもちろん、回答者の協力が不可欠である。例えば、Fitzpatrick & Sollie (1999) では、2割ほどの人が記録不備で分析から除外されており、有効回答率をいかに上げるかが日誌法を実施する際の重要な課題であると考えられる。また、毎日の相互作用1つ1つに対する回答が得られるため、1人の回答者から多くの繰り返しのデータが収集される。これをどのように分析すべきか、という点も検討の余地がある。Nezlek (2003) では MRCM (multilevel random coefficient modeling) という分析法が紹介されている。さらに、利点の裏返しになるが、即時的なデータが得られる反面、長い関係の歴史のうち、測定の対象となつたある2週間が、どの程度その関係のコミュニケーションを代表するデータであるのかという問題点も指摘できるだろう。

日常的コミュニケーションを捉える手法として、日誌法はかなり有用だと考えられる。しかし、日誌法の欠点もいくつか指摘でき、それを補うためにも従来からの質問紙法や場面想定法などが併用されることが望まれる。

第7節 最後に

日常的コミュニケーションは、些細なコミュニケーションと思われがちであるため、当人には把握され難いコミュニケーションである。しかし、日常的コミュニケーションの機能や役割は軽視できないものである。これまで、あいまいなまま認識されていなかった日常的コミュニケーションを丁寧に取り上げ、その効果を確認していく必要があるだろう。この分野における今後の課題として、Shea & Pearson (1986) は、関係維持の予測因である変数を切り離し、それらが関係を安定的に維持するのに効果をもつのかを検証することだろうと述べている。まだまだ発掘されていない日常的コミュニケーションの側面や、認識されていない機能が存在していると考えられる。それらが1つずつでも明らかとなれば、親密な人間関係においてどのようなコミュニケーションが関係の良

好さにつながるのかを提言していくものと考えられる。
今後の研究の発展を期待したい。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Altman, I., Vinsel, A., & Brown, B. B. (1981). Dialectic conceptions in social psychology: An application to social penetration and privacy regulation. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 14. New York: Academic Press. pp. 107-160.
- Ayres, J. (1983). Strategies to maintain relationships: Their identification and perceived usage. *Communication Quarterly*, 31, 62-67.
- Baxter, L. A. (1987). Symbols of relationship identity in relationship cultures. *Journal of Social and Personal Relationships*, 4, 261-280.
- Baxter, L. A., & Dindia, K. (1990). Marital partners' perceptions of marital maintenance strategies. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 187-208.
- Bell, R. A., Buerkel-Rothfuss, N. L., & Gore, K. E. (1987). "Did you bring the yarmulke for the cabbage patch kid?": The idiomatic communication of young lovers. *Human Communication Research*, 14, 47-67.
- Bell, R. A., Daly, J. A., & Gonzalez, M. C. (1987). Affinity-maintenance in marriage and its relationship to women's marital satisfaction. *Journal of Marriage and the Family*, 49, 445-454.
- Bell, R. A., & Healey, J. G. (1992). Idiomatic communication and interpersonal solidarity in friends' relational cultures. *Human Communication Research*, 18, 307-335.
- Berg J. H., & Clark, M. S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winsread (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. pp. 101-128.
- Braiker, H. B., & Kelley, H. H. (1979). Conflict in the development of close relationships. In R. L. Burgess & T. L. Huston (Eds.), *Social exchange in developing relationships*. New York: Academic Press. pp. 135-168.
- Bruess, C. J. S., & Pearson, J. C. (1993). 'Sweet pea' and 'pussy cat': An examination of idiom use and marital satisfaction over the life cycle. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 609-615.
- Burleson, B. R., & Denton, W. H. (1992). A new look at similarity and attraction in marriage: Similarities in social-cognitive and communication skills as predictors of attraction and satisfaction. *Communication Monographs*, 59, 268-287.
- Canary, D. J., & Stafford, L. (1992). Relational maintenance strategies and equity in marriage. *Communication Monographs*, 59, 243-267.
- Canary, D. J., Stafford, L., Hause, K., & Wallace, L. (1998). An inductive analysis of relational maintenance strategies: A comparison among lovers, relatives, friends, and others. *Communication Research Reports*, 10, 5-14.
- Cupach, W. R., & Metts, S. (1986). Accounts of relational dissolution: A comparison of marital and non-marital relationships. *Communication Monographs*, 53, 311-334.
- 大坊郁夫 (1990). 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊—心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁夫 (1998). しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝えあうか— セレクション社会心理学—14 サイエンス社
- Dainton, M., & Aylor, B. (2002). Patterns of communication channel use in the maintenance of long-distance relationships. *Communication Research Reports*, 19, 118-129.
- Dainton, M., & Stafford, L. (1993). Routine maintenance behaviors: A comparison of relationship type, partner similarity and sex differences. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 255-271.
- Dindia, K. (2002). Self-disclosure research: Knowledge through meta-analysis. In M.

原 著

- Allen, R. W. Preiss, B. M. Gayle, & N. A. Burrell (Eds.), *Interpersonal communication research: Advances through meta-analysis*. Mahwah, NJ, US: LEA. pp. 169-185.
- Dindia, K., & Baxter, L. A. (1987). Strategies for maintaining and repairing marital relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 4, 143-158.
- Duck, S. (1988). *Relating to others*. Pacific Grove, Calif. : Brooks/Cole Pub.
- Duck, S., & Barnes, M. K. (1992). Disagreeing about agreement: Reconciling differences about similarity. *Communication Monographs*, 59, 199-208.
- Duck, S., & Miell, D. E. (1986). Charting the development of personal relationships. In R. Gilmour & S. Duck (Eds.), *The emerging field of personal relationships*. Hillsdale, NJ: LEA. pp. 133-143.
- Duck, S., & Pittman, G. (1994). Social and personal relationships. In M. L. Knapp & G. R. Miller (Eds.), *Handbook of interpersonal communication*. 2nd ed. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 676-695.
- Duck, S., Rutt, D. J., Hurst, M. H., & Strejc, H. (1991). Some evident truths about conversations in everyday relationships: All communications are not created equal. *Human Communication Research*, 18, 228-267.
- Emmers, T. M., & Dindia, K. (1995). The effect of relational stage and intimacy on touch: An extension of Guerrero and Andersen. *Personal Relationships*, 2, 225-236.
- Emmers-Sommer T. M. (2004). The effect of communication quality and quantity indicators on intimacy and relational satisfaction. *Journal of Social and Personal Relationships*, 21, 399-411.
- Fitzpatrick, J., & Sollie, D. L. (1999). Influence of individual and interpersonal factors on satisfaction and stability in romantic relationships. *Personal Relationships*, 6, 337-350.
- Gilbertson, J. A, Dindia, K., & Allen, M. (1998). Relational continuity constructional units and the maintenance of relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 774-790.
- Goldsmith, D. J., & Baxter, L. A. (1996). Constituting relationships in talk: A taxonomy of speech events in social and personal relationships. *Human Communication Research*, 23, 87-114.
- Gudykunst, W. B., & Shapiro, R. B. (1996). Communication in everyday interpersonal and intergroup encounters. *International Journal of Intercultural Relations*, 20, 19-45.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1991). The waxing and waning of relational intimacy: Touch as a function of relational stage, gender and touch avoidance. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 147-165.
- Haas, S. M., & Stafford, L. (1998). An initial examination of maintenance behaviors in gay and lesbian relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 846-855.
- 平山順子・柏木恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度—夫と妻は異なるか?— 発達心理学研究, 12, 216-277.
- Hopper, R., Knapp, M. L., & Scott, L. (1981). Couples' personal idioms: Exploring intimate talk. *Journal of Communication*, 31, 23-33.
- 堀毛一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- Huston, T. L., Surra, C. A., Fitzgerald, N. M., & Cate, R. M. (1981). From courtship to marriage: Mate selection as an interpersonal process. In S. Duck & R. Gilmour (Eds.), *Developing personal relationships. Personal Relationships* Vol. 2. New York: Academic Press. pp. 53-88.
- Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 5, 221-231.
- Jourard, S. M. (1971). *The transparent self*. 2nd ed. New York: Van Nostrand Reinhold.
- (ジュラード, S. M. 岡堂哲雄(訳) (1974). 透明なる自己 誠信書房)
- Kafetsios, K., & Nezlek, J. B. (2002). Attachment styles in everyday social interaction. *European Journal of Social Psychology*, 32, 719-735.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学—社会変動・発達・ジェ

- ンダーの視点 東京大学出版会
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か— 心理学研究, 74, 122-130.
- 川上善郎・川浦康至・古川良治・片山美由紀・杉森伸吉・鈴木靖子 (2002). 社会的現実形成にかかる—ニュースメディアの可能性と限界— 平成12-13年度科学研究費補助金基盤研究(B) (2) 研究成果報告書
- 数井みゆき (1998). 結婚・夫婦関係の心理学 その理論と実証研究の展望 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 一家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房 pp. 51-97.
- Knapp, M. L. (1984). *Interpersonal communication and human relationships*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Knapp, M. L., & Vangelisti, A. L. (2004). *Interpersonal communication and human relationships*. 5th ed. Boston: Allyn and Bacon.
- 久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ—RC I の妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- Lewis, R. A. (1972). A developmental framework for the analysis of premarital dyadic formation. *Family Process*, 11, 17-48.
- 牧野由美子・田上不二夫 (1998). 主観的幸福感と社会的相互作用の関係 教育心理学研究, 46, 52-57.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-342.
- 松井 豊 (1993). 恋ごころの科学 セレクション社会心理学-12 サイエンス社
- Messman, S. J., Canary, D. J., & Hause, K. S. (2000). Motives to remain platonic, equity, and the use of maintenance strategies in opposite-sex friendships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 67-94.
- Miller, G. R., & Parks, M. R. (1982). Communication in dissolving relationships. In S. Duck (Ed.), *Dissolving personal relationships. Personal relationships*. Vol. 4. New York: Academic Press. pp. 127-154.
- 森岡清美 (1993). 現代家族変動論 ミネルヴァ書房
- 中村雅彦 (1991). 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.
- Nezlek, J. B. (2003). Using multilevel random coefficient modeling to analyze social inter-action diary data. *Journal of Social and Personal Relationships*, 20, 437-469.
- Nezlek, J. B., Richardson, D. S., Green, L. R., & Schatten-Jones, E. C. (2002). Psychological well-being and day-to-day social interaction among older adults. *Personal Relationships*, 9, 57-71.
- Nguyen, M. L., Heslin, R., & Nguyen, T. D. (1976). The meaning of touch: Sex and marital status differences. *Representative Research in Social Psychology*, 7, 13-18.
- Nguyen, T. D., Heslin, R., & Nguyen, M. L. (1975). The meanings of touch: Sex differences. *Journal of Communication*, 25, 92-103.
- Patterson, M. L. (1988). Functions of nonverbal behavior in close relationships. In S. Duck, D. F. Hay, S. E. Hobfoll, W. Ickes, & B. M. Montgomery (Eds.), *Handbook of personal relationships: Theory, research and interventions*. Oxford, England: John Wiley & Sons. pp. 41-56.
- Rosenfeld, L. B., Kartus, S., & Ray, C. (1976). Body accessibility revisited. *Journal of Communication*, 26, 27-30.
- Rusbult, C. E., Johnson, D. J., & Morrow, G. D. (1986). Impact of couple patterns of problem solving on distress and nondistress in dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 744-753.
- 桜庭恵理 (1995). 恋愛関係の進展と自己開示の関連について 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 230-231.
- Shea, B. C., & Pearson, J. C. (1986). The effects of relationship type, partner intent, and gender on the selection of relationship maintenance strategies. *Communication Monographs*, 53, 352-364.
- Sigman, S. J. (1991). Handling the discontinuous aspects of continuous social relationships: Toward research of the persistence of social forms. *Communication Theory*, 1, 106-127.
- 相馬敏彦・山内隆久・浦光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性がそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.
- Stafford, L. (2003). Maintaining romantic

原 著

- relationships: Summary and analysis of one research program. In D. J. Canary & M. Dainton (Eds.) *Maintaining relationships through communication: Relational, contextual, and cultural variations*. Mahwah, NJ: LEA. pp. 51-77.
- Stafford, L., & Canary, D. J. (1991). Maintenance strategies and romantic relationship type, gender and relational characteristics. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 217-242.
- Stafford, L., Dainton, M., & Haas, S. (2000). Measuring routine and strategic relational maintenance: Scale revision, sex versus gender roles, and the prediction of relational characteristics. *Communication Monographs*, 67, 306-323.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価—自記入式夫婦関係尺度について— *季刊精神科診断学*, 8, 155-166.
- 鈴木康平・山浦一保 (1995). 現代青年の交友・恋愛・結婚に関する意識調査 *熊本大学教育実践研究*, 12, 7-20.
- Sypher, H. E. (1980). Illusory correlation in communication research. *Human Communication Research*, 7, 83-87.
- 多川則子・吉田俊和 (印刷中). 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 *社会心理学研究*, 22 (2006年11月刊行予定)
- 立脇洋介・松井 豊・比嘉さやか (2005). 日本における恋愛研究の動向 *筑波大学心理学研究*, 29, 71-87.
- Vangelisti, A. L., & Banski, M. A. (1993). Couples debriefing conversations: The impact of gender, occupation, and demographic characteristics. *Family Relations*, 42, 149-157.
- 和田 実 (1996). 非言語的コミュニケーション—直接性からの検討— *心理学評論*, 39, 137-167.
- 和田 実 (2000). 大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応—性差と恋愛関係進展度からの検討— *実験社会心理学研究*, 40, 38-49.
- Wheeler, L., & Nezlek, J. (1977). Sex differences in social participation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 742-754.
- Wood, J. T. (1982). Communication and relational culture: Bases for the study of human relationships. *Communication Quarterly*, 30, 75-83.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 *実験社会心理学研究*, 34, 105-115.
- Zietlow, P. H., & Sillars, A. L. (1988). Life stage differences in communication during marital conflicts. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 223-245.

(2005年9月30日 受稿)

ABSTRACT

A review of communication studies dealing with intimate relationship maintenance: Focusing on daily communication

Noriko TAGAWA

The purpose of this study was to review studies which examined communication aimed at maintaining intimate relationships. Much of the previous work has focused on the processes and strategies of initiating and terminating relationships. Although the stages of initiating and terminating relationships are important, people spend more time maintaining relationships than initiating or terminating them (Duck, 1988). Given this argument, researchers have recently begun to investigate communication strategies and routines that function to maintain relationships (Stafford & Canary, 1991). This review focused on studies of relational maintenance strategies, discussing future research directions. In addition, other daily communication and research methodology were also examined.

Key words: intimate relationships, relational maintenance, daily communication